

## コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

### ニセアカシア (*Robinia pseudoacacia* L.)

福永健司 (東京農業大学地域環境科学部) fuku@nodai.ac.jp



ニセアカシア, 別名ハリエンジュ (*Robinia pseudoacacia* L.) はマメ科ハリエンジュ属の落葉高木である。北米東北部原産で、樹高は 25 m に達する。葉の基部には托葉が変化した刺がある。花は芳香を放ち、5~6 月頃に開花、白色で蝶形の花を総状に掛けて垂れ下がる<sup>6)</sup>。わが国では明治初期 (1874 年<sup>2)</sup>, 諸説あり) に輸入されたと言われ、当初はアカシアと呼んでいたが、後に本物のアカシア属が入ってきて、混乱を避けるためニセアカシアと呼称を改めたとされている。

学名にある「pseudo-」は嘘とか偽のという意味であり、英名でも False Acacia と呼ばれることがある。学名で言う *Acacia* は、オセアニアを中心に 400 種以上もある熱帯~亜熱帯性のアカシア属のことであり、刺のあるものが多い<sup>7)</sup>。「ニセ」の由来はこの刺によるものと考えられる。ミモザと称される切り花はアカシア属フサアカシアのことを指すことが多く香水原料にもなるが、学名の *Mimosa* はオジギソウなどネムリグサ属のことで、同じマメ科ながら別属である。さらに、別称のハリエンジュは、同じマメ科のクララ属エンジュやイヌエンジュ属イヌエンジュに似ていて刺 (針) があることから付けられた呼び名である。

かつてわが国の山地や里山は荒廃し、疲弊し、土壌侵食を防止したり、土地生産性を上げることが急務であった。そこで、空中窒素固定を行う根粒菌と共生し、肥料木と称されるマメ科樹木の本種が注目された。幼時の成長も早いことから、治山・砂防用をはじめ、飼料木、薪炭材、用材、街路樹などに用いられてきた。昭和 30 年代までは救国樹とさえ呼ばれ、刺なし品種を輸入したり、繁殖や有効利用のための研究、普及が盛んに行われた<sup>2) ほか</sup>。その頃に発行された草地学関連の書籍には必ずニセアカシアは登場し、農業高校の畜産課程用教科書にも掲載されている。当時、本種がいかに重要視されていたかがわかる。現在では、良質な密源植物として養蜂業での価値が非常に高くなっている。

さて時代は変わり、世界的な生物多様性保全への関心の高まり、生物多様性条約の締結や外来生物法の施行など国家施策としての取り組みが進められている中で、ニセアカシアは自然生態系を乱す恐れのある植物として駆除対象候補となっ

た。遷移が進まず地域の自然生態系が回復しにくいことや、山地に植栽されたものが母樹となって下流の河原に繁茂し、河原という攪乱頻度の高い環境に依存する希少な自生種を駆逐する危険性があることなどが指摘されている<sup>1) ほか</sup>。

では、救国樹といわれていた時代には、ニセアカシアは単に有用性だけが謳われていたのが調べてみた。浅根性で倒れやすいことは古くから知られていたようである<sup>2)</sup>。また、倉田<sup>3)</sup>は、ニセアカシアは「一度成林すると林種転換が難しいので、... (中略) ...、この導入には慎重さが要望される。」さらに、「幹や地中根からの再生力がとても強く、絶やすことは難しく、他の樹に変更する場合に支障が多いから、林種転換を計画する場所には初めから植えない方がいい」と述べている。同時に、退治する方法についても若干であるが触れている。つまり、50 年ほど前からニセアカシアの欠点は指摘されていて、枯殺方法についても検討され始めていたのである。その後の文献にも長所と欠点の両方が記載されていることが多い<sup>5) ほか</sup>。

過去、ニセアカシアが果たしてきた役割は誰もが認めるところであるが、すでに定着し分布を拡大している本種の管理技術を早急に確立する必要があるのは明らかである。ここであえて取り上げたのも、かつては国を救うともてはやし、導入を推奨したわれわれ緑化人のニセアカシアに対する責任であると思うからである。

#### 引用文献

- 1) 環境省自然保護局ほか (2006) 平成 17 年度外来生物による被害の防止等に配慮した緑化植物取扱方針検討調査報告書, 283 pp.
- 2) 倉田益二郎 (1949) 特用樹種, 朝倉書店, pp. 79-95.
- 3) 倉田益二郎 (1959) 緑化工概論, 養賢堂, pp. 253-256.
- 4) 日本生態学会編 (2002) 外来種ハンドブック, 地人書館, 204 pp.
- 5) 坂口勝美ほか編 (1985) 有用広葉樹の知識 育て方と使い方, 林業科学技術振興所, pp. 275-277.
- 6) 佐竹義輔・原 寛・巨理俊次・冨成忠夫編 (1989) 日本の野生植物 (木本 I), 平凡社, 245 pp.
- 7) 湯浅浩史・前川文夫編 (近藤典生監修) (1989) マメ科資源植物便覧 (訂正版), 内田老鶴圃, 511 pp.



ニセアカシアの豆果  
- この年は夥しいほど実っていた  
長野県白馬村姫川支流平川（2005年9月）



ニセアカシアの花  
- 養蜂業にとっては重要な蜜源植物  
神奈川県山北町酒匂川支流中川  
（2005年5月）



奇数羽状複葉の基部にある托葉が変化した  
鋭い1対の刺が特徴  
長野県白馬村姫川支流平川（2005年9月）



荒廃河川の比較的安定した中州（土石流堆積物）に成立した  
ニセアカシア  
長野県小谷村姫川支流浦川（2005年9月）